

追悼・小林静枝

小林静枝さんの思い出

秋山 駿

住職小林覚雄さんの母上である、小林静枝さんが亡くなられた。享年八十八歳である。

突然の訃報を耳にして、わたしは、あっと驚いた。年老いてもなお、年齢のことなぞ考えさせないほど元気な人には、不思議な存在感があるもので、いつまでもその姿、そのかたちで居られるであろう、と思わせるからである。すこし前に、わたしは、九十歳になった瀬戸内寂聴さんと対談してきたが、寂聴さんにもそんな存在感があった。

二年前まで、毎年の夏、浄運寺は無明塾という講座を開き、わたしも中野孝次や加賀乙彦や窪島誠一郎とともに講演に行った。いつもにっこり笑って迎えてくださるのが静枝さんだった。

そして、この数年は、つくづくわたし顔をしながら、「とても、よう似ていなさる」と、言うようになった。誰に？

実は、わたしと小林覚雄さんとは、従兄弟同士である。静枝さんの夫であり、覚雄さんの父上であるところの、小林宥雄前住職は、わたしの母

の弟である。わたしは戦前の小学生時代、毎年の夏休みに浄運寺に来ては、宥雄叔父さんに遊んでもらっていた。

その宥叔父さんに「とても、よう似ていなさる」と言うのだ。

ところが、まことに面白いことというか、不思議なことというか、わたしの母もまた、同じ事を言っていたのである。母は、戦争中わたしが中学一年のときに死んだ。だから、小学生高学年くらいから、母はいつも、

「お前は宥叔父さんにそっくりだ」と、言っていたのだ。なるほど、自分で思ってみても、中学生時代のわたしの写真は宥叔父さんによく似ている。

いつのことだったか、記憶がはっきりとしないが、静枝さんが宥叔父さんと、おそらく新婚の挨拶のためだろうが、東京は杉並区阿佐ヶ谷の秋山家へ来られた。わたしの家は、浄運寺のことはあまり知らぬ継母の時代になっていた。乱暴な日常生活のなか、深夜に家に戻ってきたわた

しは、翌朝、お二人が並んで居るところを見て、はっと息を呑んだ。それこそ一幅の絵のようだった。静枝さんが光っていた。

記憶がはっきりしないのは、その頃は、わたし、というより、われわれの世代は、まったく乱暴な日常生活を送っていたからである。敗戦す



秋山氏(右から2人目)と、静枝(同5人目)＝平成14年夏の無明塾

は、そんな意味のものだった。自分の家でも孤立し、親類の前にも顔をだしなかつた。それで、長い間、浄運寺にも顔をだしなかつた。

わたしは、静枝さんに聴いてみたことがあった。それは、いわゆる大黒さん(梵妻さん)の日常生活の内容である。

わたしは、だから戦前の子供の夏休み時代に、母方の祖父母に当たる、小林徳雄・美和夫妻の日常生活を見してきた。

和尚さんの方には、お酒を呑むという気晴らしがあったが、祖母の方は、そうはいかない。一日中働き詰めであり、その厳しい生活態度は、われわれ悪戯盛りの連中にも、畏敬の念を生じさせるものだった。人生の厳しさというものが、生きた像としてそこに在った。大変だなあ、と言うのみで、その他の言葉の形容など見当たらなかつた。

三枝和子という女性作家と知り合ったとき、自分は千年の寺の大黒さんだ、と言うので、その日常を聴いた。確かに、生活の実力者であるという存在感があった。

わたしは、静枝さんが、浄運寺を背負ってたった一人で戦う、そんな日々が在ったと思う。

(文芸評論家)